

柴田・中田(2025)「室津港の宝永地震および安政南海地震による隆起量の再検討」

表3 港の深さの推移。

Table 3 Transition of the depth of the Murotsu Port.

寛永十七年(1640) 『室戸港記』	港内 干潮 八尺余(2.5 m)
寛文十三年(1673) 『請願書』	港内 干潮 二・三尺(0.6-0.9 m)
延宝七年(1677) 『室戸港忠誠傳』	海面すれすれの高さ七・八尺 (2.1-2.4 m)の岩を除く
元禄四年(1691) 『延宝五丁巳歳ヨリ覚書』	入口 満潮 八尺五寸(2.6 m) 干潮 二尺七寸(0.8 m) 港内 満潮 七丈二尺(3.6 m) 干潮 六尺(1.8 m)
元禄十年(1697)～ 同十三年(1700)の間 『元禄国絵図』	入口 満潮 二尋 (12 尺, 3.6 m) 港内 満潮 二尋三尺(4.5 m)
宝永地震(1707)前 『手鏡』	入口 満潮 一丈二尺(3.6 m) 干潮 六尺五寸(2.0 m) 港内 満潮 一丈四尺(4.2 m) 干潮 八尺五寸(2.6 m)

p.170 第4章 から抜粋

「久保野家資料9-2」の『室津港手鏡』には、安政南海地震の際に「汐四尺程へり」とある。Shimazaki・Nakata (1980)では、この4尺(1.2 m)を室津の隆起量として採用した。これについて、橋本・他(2024)では、

室津港近くの浮津にある浮津八主子宮〔図1〕の『八王子宮御当家記帳』[都司(1981)p.116]には、「室津港の潮四尺計りも足り申さざる様に相成りて、」とある。『室津港手鏡』と『八王子宮御当家記帳』は、地震直後の地盤隆起を観察した地元の記録であることから、安政南海地震の室津港の隆起量を4尺(1.2 m)とする。この数値は、Shimazaki・Nakata (1980)お

p.170 第5章から抜粋

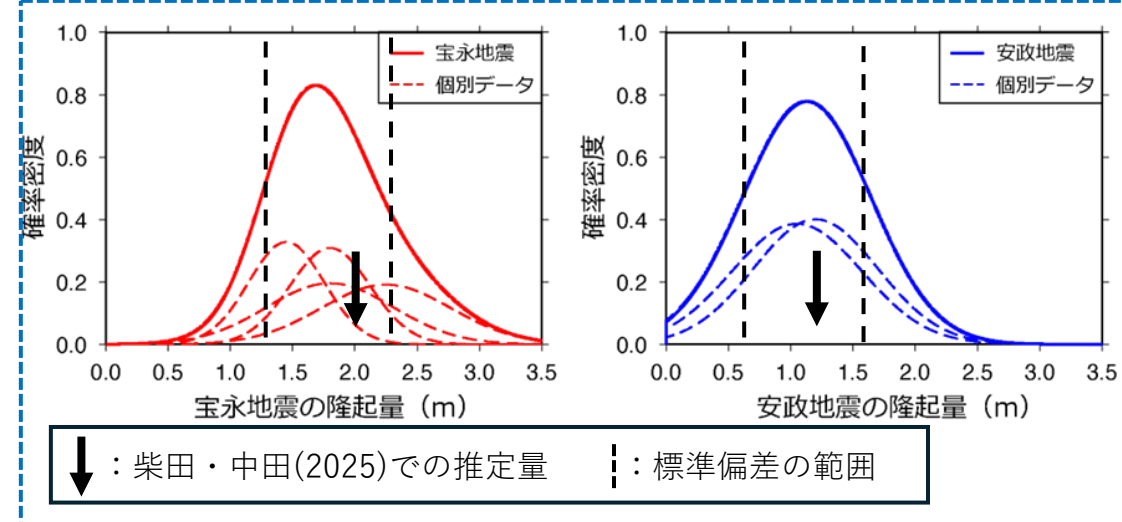
宝永地震については、隆起量を直接記録する現地の史料は確認されていないため、地震以前の港口の深さと、『宝永大變記』の地震後の記述や『室津港沿革史』にある入舟水主の人数の変化などをもとに、隆起量を推定した。橋本・他(2024)による推定の上限值である2.4 mの隆起量では干潮時に港口が干上がるが、港口が閉塞したという記録がないことから、この隆起量は考えにくい。一方、推定の下限值である1.4 mは、『万変記』の「七尺」の記述から大きく外れている。また、役人を配置して水深を測定するなど、土佐藩が重要視していた港において、公定の「尺」の0.8 倍程度の長さに対応する「地方尺」の基準で深さを記録するのは不自然である。宝永地震による室津港の隆起量は、港口が干潮でも陸化せず、かつ『万変記』の記録から大きく外れない6尺5寸(2.0 m)が妥当と考えられる。

安政南海地震では、室津港の隆起量を記述した史料は複数確認できるが、他所で書かれた伝聞による語呂合わせ的な記録ではなく、現地の記録である4尺(1.2 m)が妥当であると考えられる。

本研究では宝永地震と安政南海地震による室津港の隆起量を検討したが、宝永地震については予察的段階であり、入港する船の吃水など絞り込む余地はまだある。室津港の隆起量は次の南海トラフ沿いの巨大地震の発生時期の推定に関わることから、さら

第二版一部改訂での
審議結果

長280海Ⅱ101長手Ⅱ11(2) 図4-4を改変



- ◆ 柴田・中田(2025)の隆起量の値は、第二版一部改訂で検討した隆起量の標準偏差の範囲に入っている。
→ 今回の検討結果を否定するものではない

- ◆ 説明文49pのL1～3の「一方で、これら史料の解釈を巡っては、多様な見解を伴う学術的議論が継続しており（中田・島崎、2024；橋本ほか、2024b）、現時点では統一的な見解には至っていない。」という記載中の学術的議論が継続している文献として、「柴田・中田、2025」を追加する。